

連載：元阪大病院長のセカンドキャリア Vol. 1

入局したのは白い巨塔！？研修医時代の研鑽を振り返る

2010年から2012年まで、大阪大学医学部附属病院の病院長を務めた福澤正洋先生。現在は医療法人せいわ会・えいしん会の理事長としてリハビリテーション病院を中心に複数の病院を束ね、新たな道を歩んでいます。福澤先生に医師のセカンドキャリアの在り方について伺う本企画。連載の1回目では研修医時代の思い出を伺いました。

連日病院に泊まり込み、それでも充実していた研修医時代

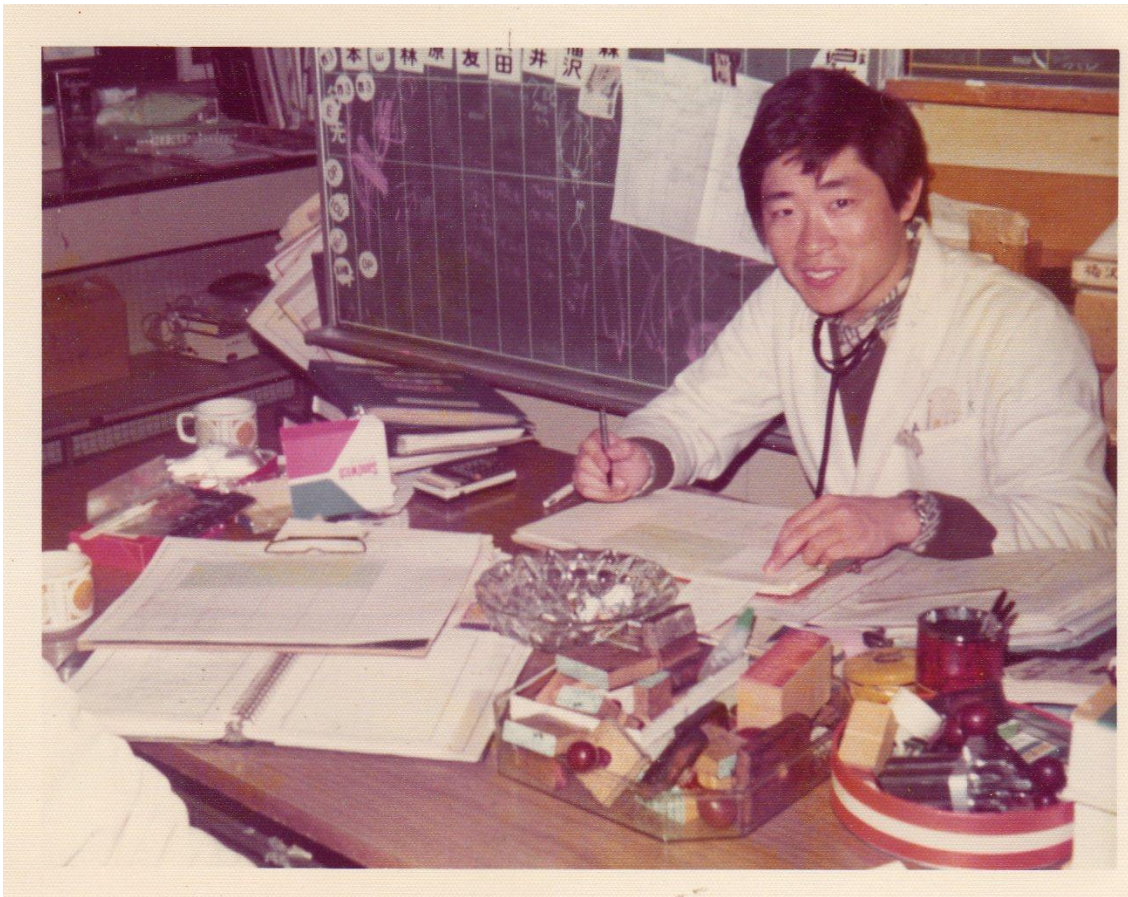
——福澤先生のこれまでの経歴からお聞きします。福澤先生は1975年7月に大阪大学第一外科に入局し、医師としてのキャリアをスタートさせました。外科医を志したきっかけ、この医局を選んだ理由を教えてください。

私は小さい頃からわりと手先が器用で、プラモデル作りなど細かいモノ作りがとても好きでした。また左利きで手を使う仕事が合っていると考え、選んだのが外科医の道です。また、若いころはアメリカのテレビドラマ「ベン・ケーシー」を見ていました。総合病院の脳神経外科に勤務する青年医師の物語は、とても人情味があり、外科医のやりがいを感じましたね。あのドラマを見て、人とのつながりを持った外科医に憧れたことも、医師を志したきっかけの一つです。

——では、大阪大学第一外科への入局は感慨深いものがあったのではないですか。

そうですね。当時、大阪大学（以下、阪大）には第一外科と第二外科があり、第一外科は心臓外科、呼吸器外科、小児外科、消化器外科と全ての分野を網羅していました。将来、自分の専門分野を自由に選択できる可能性があると考え、第一外科を選びました。

それに加え、クラスの中で第一外科の志望者が少なかったので、人数が少ない方がしっかり学べると考えました。実際には人数が少ないと、それだけ業務も多くて大変でしたが、逆にやりがいもあったと感じています。



研修医時代（阪大病院詰所にて）

——阪大は、当時の人気ドラマ「白い巨塔」のモデルとも言われていましたね。

そうですね、阪大の外科が舞台で、第二外科が中心だったと記憶しています。白い巨塔が流行したのがちょうど外科研修時代でしたね。医局でも話題にはなりましたが、そんなに囚われはしません。自分がやるべき仕事にしっかり向き合っていました。

——当時の印象深い思い出を教えてください。

当時は心臓外科が隆盛を極めていたころですので、第一外科には非常にピリピリとした緊張感が常にありました。ほかの講座と比べて「文化が違う」という感じがしましたね。現在でも交流がある仲が良い同級生も、当時は同じように感じていたようです。

——研修医時代にはどのようなことをされたのですか。

私が研修医になったころの阪大は、ちょうど新病院ができ上がったところで、設備もそろっていました。研修医ですので、日々の業務は主に患者さんの管理を行っていました。心臓外科から呼吸器外科、小児外科、消化器外科まで全ての外科診療科の患者さんを受け持っていたので、非常に多忙な日々を過ごしていました。今では考えられませんが、研修医時代の一年間は、週末以外はほぼ大学に泊まり込むハードな生活を送っていました。

さまざまな患者さんを担当しましたが、特に記憶に残っているのは心臓外科疾患の重症患者さんを最初に受け持った時です。とても緊張したのを思い出します。重症の患者さんをはじめ、さまざまな患者さんを診る生活の中で「患者さんがどうしたら楽になるか」と、常に治療の改善方法について考えていました。

——当時の阪大の職場環境は、現在と比べてどのような違いがありましたか。

現在の研修医制度では、働き方改革の考え方などが浸透していることもあり、研修医の勤務時間の管理が厳しい時代になりました。しかし当時は勤務時間の制限がほとんどなかった時代でしたから、睡眠時間の確保すら大変な生活でした。

朝8時から勤務を開始し、翌日の準備なども含めると真夜中まで仕事をするような毎日です。私たちの学年は他学年よりも人数が少なかったため、週に一回以上は宿直勤務がありましたし、それ以外にも手術の時には病院に泊まり込んでいました。



研修医終了後カラコルム登山隊に参加

恩師の教えと患者さんの声が励みに

——当時はどのような医師になることを心に描いていたのですか。モデルになった方はいらっしゃいますか。

私が第一外科に入局した時の教授が曲直部壽夫先生とあって、後に国立循環器病センター（現：国立循環器病研究センター）の初代病院長に就任した方でした。曲直部先生からは、実にいろいろなことを教えていただきました。抜糸の仕方などを直接教えてくださることも多かったですね。

曲直部先生は親分肌で非常に懐が深い方でした。教えを受ける中で自分も将来は医師としての技術をしっかりと身につけた上で、曲直部先生のような「患者さんに安らぎを与えられる医師」になりたいという思いを持ちました。

今から 50 年程前、心臓外科は新しい先天性心疾患の治療や新しい手術法を取り入れている時期でした。ですから手術後の夜は術後管理も含め、患者さんのそばに付き添う生活を続けていました。

寝る時間もなく、厳しい生活でしたが、上司の先生もチームとして一緒に診療してくれました。寄り添って接してくれたので、苦しい日々にも耐えられたのではないかと思います。

——チーム医療の中で、どういったことを学んだと思いますか。

常に患者さん中心で物事を考えるということです。自分よりも立場が上の先生方が研修医のことを常にリスペクトしてくださっており、時に私が意見を言っても受け入れてくれました。

指導医と研修医がお互いにリスペクトし合う関係ができていたような気がします。尊敬できる先生方と一緒に仕事できたのは、とても幸せな時間であったと同時に、今の私に多大な影響を与えているのではないかと感じています。

——楽しかったこと、やりがいを感じたことは何でしょうか。

当時はまだ医師になりたての初期研修医でしたが、一つ一つ患者さんのために治療を考え、少しずつ思うような結果を達成できていた気がします。

ある時、心臓外科疾患の術後が大変な患者さんがいて、気管切開を行い気管カニューレで呼吸管理を行いました。私は患者さんの状態を少しでも改善したいと考え、カニューレの使用方法を工夫し、最終的にカニューレが必要でなくなり、無事に抜去することができました。途中、上司の先生とも議論した上で、思うような結果にたどり着いたので、非常に充実感を覚えました。

また、研修医時代に担当していた患者さんの中に重症のお子さんがいました。患者さんは ICU に入っていたこともあり、ご本人と直接のコンタクトは難しかったのですが、付き添いの親御さんから非常に感謝されました。私が医師として初めて感謝された体験で、今でも強く心に残っています。

——現在キャリアを積みつつある医師へ伝えたいことはありますか。

若いうちは関連病院への出向など、自分の意にそぐわないことがあるかもしれません。しかし、研修医時代は置かれた環境で何かを学び取ろうとする姿勢が大切です。

実際に私も体験してきたから言えることなのですが、環境が変わっても、常にそこから自分が何をつかみ取れるかを考え続けることがとても大事だと思います。そうした姿勢が次のステップにつながるのではないかと思いますね。

——次回は小児外科を専門に定め、留学、日大教授就任、母校の教授就任とステップアップされた背景を伺います。

【プロフィール】

福澤 正洋（ふくざわ・まさひろ）先生

1975年大阪大学医学部医学科卒業、第一外科学での研修医、関連病院での研鑽を経て、1983年大阪大学医学部小児外科助手。1986年米国N. I. H.に留学し、帰国後1988年大阪府立母子保健総合医療センター小児外科医長を務める。1998年日本大学医学部第一外科学講座主任教授に就任し外科の体制づくりに尽力。大阪大学大学院医学系研究科小児外科学教授、大阪大学医学部附属病院副病院長職を経て、2010年から2年間病院長を務める。大阪府立母子保健総合医療センター総長を務めた後、2016年から医療法人社団生和会理事長に就任。



【取材・文=石原健児、写真・画像は福澤先生提供】

連載：元阪大病院長のセカンドキャリア Vol.2

阪大**第一外科**の教授選「プレゼンなし他薦で決定」の逸話

2010年から2012年まで大阪大学医学部附属病院の病院長を務めた福澤正洋先生。現在は医療法人せいわ会・えいしん会の理事長として、リハビリテーション病院を中心に複数の

病院を束ね、新たな道を歩んでいます。福澤先生に医師のセカンドキャリアの在り方について伺う本企画。今回は小児外科医を目指したきっかけから、大阪大学教授に就任するまでの思い出を伺いました。

教授の薦めに NO! 自らの思い貫き、更なる研鑽へ

——小児外科医を目指したきっかけを教えてください。

私がお阪大学（以下、阪大）に入学したのは昭和 44 年（1969 年）。ちょうど東大の学園紛争が最も激しい時でした。入学後も紛争の影響で全く授業が行われなかったのですが、阪大病院（大阪大学医学部附属病院）を見学していた時に、小児外科病棟を見学する機会がありました。その時小児外科にいらっしゃったのが岡本英三先生です。岡本先生に胆道閉鎖症術後のお子さんの説明をしていただいたのですが、小児の患者さんを救う姿に非常に感銘を受けたことが、小児外科医を目指すスタートになりました。

——外部医療機関での経験を経て、1979 年からは大阪大学に戻られました。この時期、特に印象に残っていることを教えてください。

この時期は、自分の道を選択したことが一番のキーポイントだったような気がします。初期研修終了後は兵庫県にある市立芦屋病院と川崎病院で計 3 年間、成人の消化器外科の研鑽を積みました。

その後、再び第一外科に戻った時には、教授が川島康生先生に交代していました。川島先生からは、何度か心臓外科を選択するように勧められたのですが、お子さんを助けたいという学生時代からの思いはどうしても捨てがたく、自分は小児外科の道を進みたい旨を強くご説明しました。

——当時は、教授の決定は絶対という時代だったのではないのでしょうか。

時代としてはそうかもしれませんね。ただ、熱意が伝わり最終的には川島先生にも納得いただいて、小児外科分野を選択できました。

——小児外科では何を専門に学んだのですか。

小児外科で研究テーマとして選んだのは小児がんです。この研究テーマ選択は、私の人生の一つの転換点となったと思います。私は学生時代に 3 カ月間、基礎講座配属先として阪大の腫瘍免疫を扱う腫瘍発生学教室を選びました。当時は山村雄一先生、北川正保先生が中心となって日本免疫学会がようやくスタートしたばかりでしたが、大阪大学はもともと免疫学が盛んで私も基礎講座配属期間の学びで、免疫学に非常に興味を持っていました。

当時、小児外科で指導をしていたのが岡田 正先生です。私の先代の教授で、大阪大学小児外科の初代教授となった方です。岡田先生は外科代謝栄養学の研究を専門になさってい

ました。小児外科を専攻後、臨床テーマを何にするかという中で岡田先生からは“がんと栄養”の研究を勧められました。

しかし、がん免疫を研究したかった私は、ここでも自分の意思を伝えるべく岡田先生と話し合いました。最終的には私の希望を受け入れていただき、がん免疫の研究をすることになり、再び腫瘍発生学教室で学びました。2年間の研究の末、学位を取得し、同時に1983年に大阪大学医学部小児外科の助手になりました。

——進路選択もご研究も、上級医の方針に従うだけでなく、自身のやりたいことをしっかり貫いてこられたのですね。その後、1983年には小児外科助手になられました。この経緯や背景を教えてください。また、どのように感じましたか。

当時は国の後押しもあり、日本各地で小児外科教室ができ始めたころでした。ちょうど阪大でも第一外科から小児外科が独立し、新たな診療科として認められた時期に、新設されたポストである小児外科助手のご案内をいただいたのです。それまでは小児がんの研究自体が注目されていませんでしたし、これで新たに自分の手できざまな取り組みができるのではと、うれしく感じました。

——1986年からは2年間の米国留学をされています。

もともと私は、ECFMG（米国での研修資格認定）試験を受けるなど、研修医時代から留学をしたいという気持ちを持っていました。私が留学した1980年代は肝移植の研究が盛んになり始めた時代です。ただ、移植免疫の研究はまだそれほど行われていませんでした。がん免疫と移植免疫は表裏関係で、強い関連があります。ちょうど私も腫瘍発生学教室でがん免疫について学んでいた時でしたので、ぜひ移植免疫を学びたいと考え、1986年に米国N.I.H（アメリカ国立衛生研究所）に留学し移植免疫の研究をすることにしました。



米国N.I.H.留学

——留学後、それまでの環境との大きな違いはどんなことでしたか。

米国では仕事とプライベートのどちらも重要視します。業務は就業時間内に行い休日もしっかりと取ります。そうした環境に身を置くわけですから、留学後の生活は一変しました。日本で生活していたころは、子どもとの生活スケジュールが合わず、家族と過ごす時間もほとんどありませんでした。

しかし留学後の2年間はプライベートな時間が増え、子どもと遊んだり、一緒に英語の勉強をしたりなど、充実した家族の時間を過ごすことができました。仕事の面でも時間や予算に余裕があり、自由に研究ができました。その結果、論文を完成させることができ、私自身の次のステップへとつながりました。

留学での経験を生かして周囲を牽引、教授に就任

——帰国後は、大阪府立母子保健総合医療センター小児外科医長に就任されています。

1981年、大阪府には大阪府立母子保健総合医療センターが開設され、1991年からは小児医療部門（子ども病院）の運営がスタートしました。阪大から小児外科スタッフが派遣されていたこともあり、留学中に教授から同医療センターの小児外科医長就任の打診をいただいていた。米国留学をもう1年続けたいという気持ちもありましたが、この機会に再び外科手術に取り組むのもいいかなと考え、帰国後に小児外科医長に就任することとなりました。

大阪府立母子保健総合医療センターは、手術も数多く扱う大阪南部のハイボリュームセンターでした。4人という少ない医師で運営していたため時間的に厳しい生活でしたが、新生児外科を中心とする手術を数多く手がけることができ、とてもやりがいを感じました。

——1989年に再び、大阪大学に戻りましたが、以前と比べて何か違いはありましたか。

阪大の小児外科がスタートしてからそれほど時間は経過していませんでしたが、再び戻ると、教室の運営がずいぶん充実していると感じました。おかげで私も、留学で学んできた移植免疫の知識と経験を生かし、教室内の小児がん、移植医療という二部門の臨床・研究推進に力を入れることができました。自ら臨床にも携わりながら、小児がん、移植医療を目指す大学院生や若い先生方、海外からの留学生への教育・指導もでき、とてもやりがいがありました。

——1998年には大阪大学を出られ、日本大学医学部の第一外科学講座主任教授に就任されています。これにはどんな経緯があったのですか。

当時、日本大学の第一外科には消化器外科・小児外科・乳腺内分泌外科という三つのグループがあり、小児外科は国内における草分け的な存在でした。しかし、小児外科グループが縮小傾向にあったので、そこをもう一度盛り上げることで、そして、第一外科から第三外科まで含めた外科全体の臓器別再編のミッションを果たす役割として、選出いただいたという経緯です。

着任後、たくさんの若い医師が入局してくれたこともあり、以前と比べ規模を拡大することができました。多い時には年々に8人が入局し、そのうち4人が小児外科を志望してくれました。併せて外科の臓器別の再編も進め、6年弱の在任中に日本大学の外科・小児外科ともに大きく成長させることができたと感じています。当時小児外科に入局した先生方は、現在でも日本大学小児外科の中心的役割を担っていただいています。



日本大学第一外科医局旅行にて

——その後、大阪大学小児外科教授に就任した背景や要因を教えてください。

2002年岡田先生の退任後、教授選考が行われるという話は耳にしていたのですが、実を言うと手を挙げるつもりはありませんでした。日大の仕事が充実していましたから。しかし、いつの間にか他薦という形で選考委員会の候補に入っていたんです。

最終選考のプレゼンテーションにも参加しなかったわけですが、日本大学での臓器別再編を評価され、教授に選出いただいたようです。日大には恩がありますから、どうしようかと思って医学部長に相談したら「母校だったらしょうがないな…」と送り出して下さったのです。



大阪大学小児成育外科バーベキューにて

——次回は阪大小児外科教授に就任後、副病院長・病院長として活躍された当時の想いを伺います。

【プロフィール】

福澤 正洋（ふくざわ・まさひろ）先生

1975年大阪大学医学部医学科卒業、第一外科学での研修医、関連病院での研鑽を経て、1983年大阪大学医学部小児外科助手。1986年米国N. I. H. に留学し、帰国後1988年大阪府立母子保健総合医療センター小児外科医長を務める。1998年日本大学医学部第一外科学講座主任教授に就任し外科の体制づくりに尽力。大阪大学大学院医学系研究科小児外科学教授、大阪大学医学部附属病院副病院長職を経て、2010年から2年間病院長を務める。大阪府立母子保健総合医療センター総長を務めた後、2016年から医療法人社団生和会理事長に就任。



【取材・文=石原健児、写真・画像は福澤先生提供】

連載：元阪大病院長のセカンドキャリア Vol.3

阪大外科教授から病院長へ 今だから話せる当時の思い出

2010年から2012年まで大阪大学医学部附属病院の病院長を務めた福澤正洋先生。現在は医療法人せいわ会・えいしん会の理事長として、リハビリテーション病院を中心に複数の病院を束ね、新たな道を歩んでいます。福澤先生に医師のセカンドキャリアの在り方について伺う本企画。今回は病院長就任から、外科医としてメスを置くまでのお話を伺いました。

院内の改革を成し遂げたい、という思いで病院長へ立候補

——2010年から2012年まで大阪大学医学部附属病院の病院長を務められました。病院長に就任されるまでにはどのような経緯があったのでしょうか。

大阪大学（以下、阪大）教授就任の翌年、私は外科系科長としてナンバー講座を臓器別に再編する役割を担いました。2004年から2006年までの2年間でしたが、日本大学での経験を生かすことができました。その後も、栄養マネジメント部部長、卒後教育開発センター長、外科系科長、外科学講座チェアパーソン、手術部部長、移植医療部部長などを歴任し、学内のさまざまな仕事に携わりました。



栄養マネジメント部（2004年開設）

また 2008年には内科系の小児科部門と小児外科部門の窓口を統一し互いに協力し合って診療にあたるべく、小児医療センターを設立しました。このときに私は、小児医療センター長を拝命しました。従来、脳外科、整形外科等の子供さんの入院する病棟は別で患者さんにもご不便をおかけしていたので、子供さんを全て小児医療センターに集約することができ、小児医療環境改善にお役に立てたことはうれしく、今でも心に残っています。小児医療センター長と並行し、医学系研究副科長、副病院長職を経て、病院長に就任したのは2010年のことです。



阪大病院小児医療センター除幕式

——どのような思いで病院長を志したのですか。

私は当時、阪大では小児医療以外にも統合や連携が必要な面がいくつかあると感じていました。そこで病院長立候補にあたっては、内科・外科の連携など院内の改革を推進したいという思いで臨みました。小児外科という、比較的小さな部門から病院長になることも挑戦の一つでした。選考を経て私が選ばれたのは、それまでの実績を認めてもらったのではないかと感じています。

——病院長として力を入れたことや、印象に残った出来事は何でしょうか。

就任から一年を過ぎたころに発生した、東日本大震災関連の出来事は印象に残っています。震災発生時の医療対応を行ったほか、被災地への医療支援体制の構築などにも尽力しました。

このほかの改革として、医療面では入退院センターの整備、内視鏡検査のセンター化とホスピタリティの向上、医療以外では阪大での長年の懸案でもあった敷地内全面禁煙を実現できました。「患者さん中心で物事を考え、居心地の良い病院にしたい」という目標がありましたので、以前から気になっていたさまざまなことを改善できたことはとても良かったと思っています。その後、禁煙については医学部からほかの学部へと少しずつ広がりました。

当時、病院長として心がけたのは、今すぐしなければならぬことから実施すること。例えば、先ほどの敷地内全面禁煙に関しても、反対派の意見が非常に強く実施までのハードルは高かったですが、患者さんのためにも必要と考え実行しました。

また、私が病院長在任中に、私の権限で若手の看護部長を選任しました。それまでの看護部は“大奥”と呼ばれるくらい医師が立ち入れない領域で、連携もうまくいっているとは言い難い状況でした。若手の新看護部長が非常に頑張ってくれて、看護部と連携がスムーズになり、患者さん目線でさまざまな改革を推進できました。スタッフの力があってこそ。非常に良い病院運営ができたのではないかと考えています。

現場に足を運び、小さな部門の意見にも耳を傾ける

——スタッフのことも大切にされていたのですね。病院トップとして、周囲との関係づくりで気を付けたことはありますか。

病院長時代は各部門を定期的に巡回していました。何か改善すべきことがないか、意見を聞くためです。透析センターなど独立していない部門や各病棟にも足を運び、意見を聞くことに徹しました。その結果、課題が見え、内視鏡センターの新設など現場レベルの改善につながりました。

——そのほか、病院長時代に力を注いだエピソードを教えてください。

病院長就任以前から私は移植医療部の部長を務めていました。当時は臓器移植が盛んになり始めたころで、阪大でも小児外科と消化器外科が肝移植を始めるなど症例数が増えました。活動が盛んになる一方でポストが少なかったため、病院長として空いているポストを振り分けるなど調整を行い、移植医療の推進を心がけました。

——もし、病院長就任当初のご自分にアドバイスするとしたら、どのような言葉を贈りますか。

やはり「現場に足を運び医師・スタッフの意見を聞く」ということを勧めたいですね。現場で集めた意見を元に改革を進めていくのは大事なことです。また、意見を聞く場所も大きな部門だけでなく、「小さな部門を大切に」と付け加えたいですね。小さな部門にはなかなか予算が振り分けられず、結果的に医療安全上の問題が起こりやすくなってしまいうためです。

例えば、私が病院長だった当時、阪大内にあった歯科治療室は、とても手狭で施設も老朽化していました。そこで、空いている施設を改修して移転し、また新たな役職を設置しました。やはりスタッフが誇りをもって働くには、目に見える形で役職を作ること大切なのです。現在では歯科治療室は立派な施設に生まれ変わっています。小さなところにも目を向けて、トラブルが起こらないよう未然に防ぐことが必要です。

メスを置く、決意のタイミングは？

——外科の第一線で活躍し続けた福澤先生ですが、メスを置くことを決意したタイミングはいつだったのでしょうか？

私がメスを置こうと決意したのは、阪大病院長就任のタイミングです。病院長はさまざまな面で責任がありましたし、若い世代に現場を任せようと考えました。若い世代にもっと現場での経験を積んで欲しいという思いもありました。

現場では「できる人物」を見定めて、その人に任せることが大事だと思っています。若い人材に外科医局に来てもらうためにも、積極的な人材育成は必要です。また指導しながらも、実務的な経験を積ませることも大事だと考えています。ですから、自分がメスを置いた時はすでに、気持ちの整理はついていたという気がします。



最終講義にて

——その後、定年退職を待たずして、阪大を去る決断をされます。当時のお気持ちをお聞かせください。

教授職という意味では、臨床教室は人材面の循環がある程度早い方が良い、というのが私の考えです。私が第一外科でお世話になっていた川島先生は任期満了まで4年、曲直部先生は7年の任期を残してほかの病院へ移っています。私自身その様子を見ていましたし、日本大学から通算すると15年間教授職に就いていました。私もいずれ次の人にバトンタ

タッチする時期を考えなくてはと思い、日本大学から再び阪大に移った時から、少しずつ教授職からの引退時期について考え始めていました。

病院長退任後は、定年まで4年を残すのみ。小児外科の中でも、私の10年ほど下の世代が育ってきていました。実は病院長時代、大阪府から母子保健総合医療センターの総長に就任してほしいとの依頼をいただいていた。あまり私が小児外科の教授職に長く在籍すると、次に教授のポストに就いた方の就任期間が短くなってしまいます。そこで、病院長の任期を終えたタイミングで、母子保健総合医療センターへの移籍を決め、次の世代へバトンタッチしたのです。



病院長退任式にて

——次回は福澤先生のセカンドキャリア、現在のライフワークについてお話しいただきます。

【プロフィール】

福澤 正洋（ふくざわ・まさひろ）先生

1975年大阪大学医学部医学科卒業、第一外科学での研修医、関連病院での研鑽を経て、1983年大阪大学医学部小児外科助手。1986年米国N. I. H. に留学し、帰国後1988年大阪府立母子保健総合医療センター小児外科医長を務める。1998年日本大学医学部第一外科学講座主任教授に就任し外科の体制づくりに尽力。大阪大学大学院医学系研究科小児外科学教授、大阪大学医学部附属病院副病院長職を経て、2010年から2年間病院長を務める。大阪府立母子保健総合医療センター総長を務めた後、2016年から医療法人社団生和会理事長に就任。



【取材・文=石原健児、写真・画像は福澤先生提供】

連載：元阪大病院長のセカンドキャリア Vol. 4

元阪大病院長、意外なセカンドキャリアの魅力

大阪大学医学部附属病院病院長の役目を終え、後の世代に道を開けた福澤正洋先生。現在は医療法人せいわ会・えいしん会の理事長として、リハビリテーション病院を中心に複数の病院を束ね、新たな道を歩んでいます。福澤先生に医師のセカンドキャリアの在り方について伺う本企画。今回は新たなキャリアを見つけ出し、現在へと続くお話を伺いました。

周囲を見渡し、リハビリテーションの重要性に気付く

——現職である医療法人せいわ会・えいしん会理事長に就任されたきっかけを教えてください。

セカンドキャリアとしてリハビリテーションを選択したわけですが、実は前任の大阪府立母子保健総合医療センター在籍中から注目していた分野です。手術後のリハビリテーションにあまり目を向けていない点が気になっていました。当時のセンターでは、整形外科の下にリハビリテーション部がありました。そこで、診療体制を充実するためにリハビリテーション科として分離し、新たな手術棟の整備事業に携わりました。



ロボット脚を使用した歩行特化リハビリテーション機器

——小さな部門を大切に、またポストを作ってやりがいを持ってもらう、阪大時代のご経験を活かされたのですね。

はい。また、脳出血で半身不随になったセンターの先生がリハビリテーションによって再び診療ができるまで回復したことをきっかけに、リハビリテーションの大切さを認識しました。そこで、定年後の次のステップ、セカンドキャリアとして急性期を退院した患者さんを在宅療養へ移行させるリハビリテーションをサポートしたいと考えるようになりました。

以前より、大阪で展開していた医療法人社団生和会から理事長就任の打診をいただいていたこともあり、2016年の定年を機に、新たな道を歩き始めました。2023年現在、医療法人せいわ会・えいしん会理事長として5カ所のリハビリテーション病院を管理しています。

——現在はどんな毎日を過ごしていらっしゃるのですか？

普段私が過ごしているのは、大阪府にある彩都リハビリテーション病院です。そこを拠点に毎週、大阪の3病院と奈良の2病院の計5カ所の病院に出向き、指導を行っています。通常は午前・午後に分けて複数の病院の視察を行っていますが、時には1カ所に1日かけることもあります。

病院の視察の合間を縫って寄稿原稿の作成を行うほか、日本小児外科学会、日本外科学会など学会への出席、研究会へも参加し、最新の医療情報を学んでいます。また、グループ内関西エリア9病院の運営会議にも毎週1日出席しています。3年ほど前までは、小児がんの研究集約のため、副理事長として日本小児がん研究グループ（JCCG）の立ち上げにも加わっていました。

現在特に力を入れているのは、セラピストの養成です。回復期リハビリテーション病棟は2000年ごろから全国で急激に増えていますが、治療にあたるセラピストの教育体制が確立されていないのが大きな問題です。キャリアプランも確立されておらず、当グループではいかにセラピストの人材育成をするか、グループ全体でディスカッションを行っています。

——理事長としての、今の大きな役割は何でしょうか。

当グループの課題の一つは、いかにしてリハビリテーションのクオリティを高めるかという点です。一例としては、食事の経口摂取の推進があります。リハビリテーションでは、急性期病院治療後の栄養状態改善が最も重要です。特に脳卒中などの脳血管疾患患者さんがリハビリテーション病院を退院時には経口摂取ができるようにしてあげたいです。

そこで当グループでは患者さんが早期に食事を開始できるよう、各病棟に歯科衛生士を配置するほか、阪大から歯科医を派遣していただき、院内に歯科を設置しています。また、グループ内の関西エリア9病院合同で各種の教育を行っており、管理栄養士による栄養状態の評価（栄養アセスメント）の教育や、患者さんがより良く食べられるよう、スタッフの教育に取り組んでいます。理事長職の大きな役割は改善のための意見を集めることです。常に治療のクオリティを高める意識を持って各病院内をチェックし、スタッフや各部門からの意見を集めています。



入院時から栄養状態と筋肉量の変化を確認しながら、リハビリテーションを進める

人材育成・研究開発、多様なやりがいを発見

——現在、どのような点にやりがいを感じていますか。

やはり、回復期リハビリテーションをよりレベルの高いものにしていくことが一つのやりがいになっています。関西エリアのグループ内にはリハビリテーション8病院の合計で1000床以上、一般病院も含めた9病院の合計では1200床以上の病床があります。そこで臨床研究も含め、各病院の診療レベル向上のための連携を目指しています。ただ、日本ではリハビリテーション医学講座はあまり多くありません。そこで、大学とも連携しアカデミックな寄付講座の開設を目指したいです。

——2022年からはチョコやクッキーの開発と実証実験を行っているそうですね。きっかけを教えてください。

岸和田リハビリテーション病院で行っているこの取り組みは、栄養関連のプロジェクトの一つです。当グループの入院患者さんは、急性期病院で治療を行ってきたケースが多く、低栄養状態の方も少なくありません。筋肉量が少なく、たんぱく質やエネルギーも足りないわけです。そこで、いかにしてエネルギーを補給するかが重要になります。

すでにメーカーからはエネルギーや栄養補給を目的としたサプリメントが各種発売されていますが、今回の臨床研究ではより手軽に栄養素を摂取できるよう、食べやすく高たんぱくなお菓子の開発を目指しています。医師の一人がスタッフと連携し、患者さんの栄養状態の改善を目指して研究を継続しています。

——人生 **100** 年時代、この先のキャリアをどのようにお考えでしょうか？展望や目標がありましたらお聞かせください。

今後はリハビリテーションや医学の進歩に少しでも貢献するために、現在のキャリアを継続できればと考えています。私自身まだまだ、続けられると感じています。

グループ内では各病院が取り組んでいる臨床研究を支援するために「SDX 研究所」という組織が出来ました。今後は企業とも連携し、リハビリテーションへのデジタル技術や AI の導入、新しい医療機器の導入など臨床研究を推進したいと考えています。

——これからセカンドキャリアとして新たな道を模索する医師の方々へ、メッセージやアドバイスをお願いします。

医師にもキャリア変革の時期は訪れます。特に外科医の場合は、やはりどこかの時点でメスを置かなければなりません。セカンドキャリアを考える時にはできるだけ、それまで培った経験・スキルを生かせる分野を選んでいただければと思います。そして、良いセカンドキャリアを見つけるためには「今後はこうしていく」という、自分の目的を明確にすることを忘れないでください。

私は理事長として医師の採用も行っているのですが、なかには定年後の方もいらっしゃいます。その中で感じることは、セカンドキャリアの構築に必要なのは「意欲」です。意欲がなければ、ただ単に収入や安易なキャリア構築を求めてしまい、なかなか充実したセカンドキャリアには繋がらないように思います。

ぜひ「これまでの経験を生かしていく」というつもりで、次のキャリアを選んでください。新たな道で自分の経験をどう生かし、どう生きがいを感じていくのか、この視点がセカンドキャリアを成功させるポイントだと思います。

【プロフィール】

福澤 正洋（ふくざわ・まさひろ）先生

1975 年大阪大学医学部医学科卒業、第一外科学での研修医、関連病院での研鑽を経て、1983 年大阪大学医学部小児外科助手。1986 年米国 N. I. H. に留学し、帰国後 1988 年大阪府立母子保健総合医療センター小児外科医長を務める。1998 年日本大学医学部第一外科学講座主任教授に就任し外科の体制づくりに尽力。大阪大学大学院医学系研究科小児外科学教授、大阪大学医学部附属病院副病院長職を経て、2010 年から 2 年間病院長を務める。大阪府立母子保健総合医療センター総長を務めた後、2016 年から医療法人社団生和会理事長に就任。



【取材・文=石原健児、写真・画像は福澤先生・病院提供】